

希望 この手に

沖縄の貧困・子どものいま

昨年12月の夜、小学生が帰り静かになった浦添市立森の子児童センターに、中学3年生が集まった。目的は、同館



森の子児童センターの指定管理者「まちづくりNPO」の職員たち。学習支援、キャリア教育と活動が広がっている。浦添市立森の子児童センター

森の子児童センター

第3部 ⑩

学習支援からキャリア教育まで

「斜めの関係」生かす

が週2回の夜間開放に合わせ、行っている学習支援。受験の年を迎えた生徒たちだが、学校の勉強から取り残された生徒が大多数だ。集中力が続かず、机に突っ伏したり、寝っ転がったりして問題を解く子どもも。「高校」として言葉を出すな」という書きを表す生徒もいた。学習時間が終わると、ご飯の時間だ。生徒に笑顔が

が多く、家庭にも学校にも居場所がない子どももいる。子ども同士で冗談のように家庭の状況を口にするのはあるが、親の悪口は言わない。「やんちゃだが、悪い子ではない」と話す。

にも広げ、中学校に向いて勉強をみるようになった。「教職員が授業に集中できるよう支援したい」

「高校」として言葉を出すな」という書きを表す生徒もいた。学習時間が終わると、ご飯の時間だ。生徒に笑顔が

「絶対学を希望した7人全員が合格した。中には試験1週間前にやる気がスイッチが入った子

「高校がゴールではない。子どもたちが自立し、納税者となることを目指したい」。

大城さんは目標を実現させるため、NPOにキャリア教育部門を設置した。新年度から市グッジョブ連携協議会の事務局となった。地元企業と連携し中学生への仕事紹介事業や、中高生の就業意識を調べるアンケートなどを予定している。

戻った。

学習支援は同年秋季に始まった。きっかけは、センター館長で、指定管理者「まちづくりNPO」の代表、大城善江子さんだ、中学3年生との会話だった。学校の成績を聞いた大城さんに、生徒はら段階評価の「1か2」と答えた。しかし「高校はどうする？」と聞くと「行きた」と返ってきた。「見守っ

日も学習支援を行った。「どうせ自分の言うことは信じてもらえない」。大城さんは、言い合いになった時に子どもが発した言葉が忘れられない。「いつも犯人扱いされていたら本意だろう」。

もいた。食事中も支援員に「教えて」と声を掛け、学習時間が終わっても1人残った。

新年度が始まり、これまでに学習支援に参加していた高校1年生が、中学生に教えるようになった。別の子ども児童館に顔を出し、近況を報告していく。大城さんは「誰でも受け入れる児童館だからこそ、子どもたちのセルフティーマットになれる」と話す。子どもたちが喜び、学び合い、自立するまでを支援したい。児童館が、地域と学校、産業界がつながった支援の拠点となることを目指している。

「見守っ

子ども児童館と子どもの関係は斜めの関係だ。だからこそできることがある」と話す。友利さんは新年度から同NPO職員となった。学習支援を小学

友利さんは新年度から同NPO職員となった。学習支援を小学

友利さんは新年度から同NPO職員となった。学習支援を小学